

---

# 神様バトル 勝利しないと世界が滅ぶ！？

芳奈揚羽

---

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

## 注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

### 【小説タイトル】

神様バトル 勝利しないと世界が滅ぶ!?

### 【Nコード】

N9017W

### 【作者名】

芳奈揚羽

### 【あらすじ】

神様と人間が共存する世界。

いろんな神様がごちゃ混ぜに存在する閻鍋みたいな国>日本<で、

1人の邪神によるゴタゴタが発生!?

久瀬くせ亜津子あつこを怒らせたのが運の尽きです。

きつちりけじめは付けさせてもらうから、覚悟するんだね!

私とりつちゃんつちの逢引あひまを邪魔した罪は重いんだからねー!

最強系女主人公のお話。

## 第1話 白猫邪神（前書き）

主人公は女の子です。

しかし作者は男です。

言葉遣いなど、変なところも多々あるかと思いますが、それでもいいと思う方は読んでくれるとうれしいです。

## 第1話 白猫邪神

この世界は、神様と人間が共存する世界。

人間の作った社会に、神様も一緒に住んでいる。

大体の国では、神様条約があつて、その国の神様の許可を取らなければ他の神様は入国出来ないの。

神様達は人間の信仰心から生まれているので、当たり前だっていえば当たり前だよな。

他の神様に人間の信仰を奪われたら力が弱まるし、最悪の場合消えちゃうし。

で、他の国ではそうやって、人間と、1人か多くても2人くらいの神様が仲良く暮らしていたんだけど、1つの国だけは違ったのよ。どこって？そんなの日本に決まってるじゃん。

だって、長く大切に使い続けた物や、米なんかの食料からまで神様が生まれる国だよ？

八百万の神っていうくらいだもん、それはもういっぱいいるのよ。てことは、人間が信仰する神様も千差万別、1人の神様に集まる信仰も高が知れてるわけで……。

たまに、すごく強い神様もいるんだけどね。

この国では、日夜人間の信仰を奪い血で血を洗う戦いが繰り返されてるわけ。

この話は、そんな神様の中の1人が引き起こしたスゴーク迷惑な話。

そして、その神様の陰謀を食い止めようと頑張った私たちのお話でもあるわけよ。

興味があるなら見ていけば？

じゃ、始まり始まりー。

「ねえねえ、あーちゃん。」

「・・・何？りっちゃん。」

「・・・日本にも、邪神つていたんだねえ・・・。」

「そうねえ・・・。」

私は久瀬亜津子。

隣にいるのが長瀬鈴。

私の幼馴染で、2人と16歳の高校生をやってる。

私たちは今、りっちゃんの家でテレビを見ながらお喋りしてたんだけど、突然番組が変わったと思ったら、俺は邪神だっていうやつがテレビに出てきて、こんな話を始めたのさ。

「俺は全ての闇を司る存在、全ての神の頂点に立つことを約束された、すばらしい神様なのだ！」

なんか、この時点でいやな予感しかしなかった。

だって・・・物凄くアホそうなんだもん。

てか、姿が完全に白猫の邪神って何？

全ての闇を司る邪神なのに、何で白猫なの？

せめて黒猫だったら、もう少し威厳があるかもしれないのに。

「俺は、この日本でしか生きていけない。なぜなら、神様条約があるからだ。これは、神様が破ろうとしても破ることができない絶対の力なのだ。」

「あーちゃん、そうなの？私この辺の話よくわからないんだけど。」

「うん、知り合いの神様に聞いたことあるなー。他の国に無許可で入ろうとすると、すごく痛い思いをするんだって。場合によっては、それで消滅もありえるくらい。何でそんなことになるのかは、誰に

もわからないらしいけど・・・。」

その神様はその時「すげえ痛かったよ。マジで泣きそうになったもん。」と泣きながら言っていたなあ。

「だが、俺はこの条約を破る方法を見つけたのだ。どうせ他の国の神に入れてくれと言っても、入れてくれるわけがない。なら、そこを強引に破って入り、そいつの信仰を奪っていくしか、今日本に住んでいる神には生きるすべがないのだ！そうだろう神様諸君！」

その言葉を聞いて私は一瞬動きを止めてしまったよ。

(今、何て言ったこの猫？)

今の話が本当なら、すごく困った話になるんだよ。

すごく、しかも世界中が。

だけど困ったことに、私の聞き間違えでは無かったわけ。

「俺は、この日本を出るぞ！日々新しい神が生まれていくこの小さな島国では、この先神々は生き残ることは出来ないんだからな！もしこの俺についてくる者がいるのなら、明日俺のところまで来い！神ならば場所がわかるはずだ！俺の居場所もわからない雑魚に用はないからな！」

白猫が一方的に話し終わると、テレビは元のチャンネルに戻り、そこではテレビ局のスタッフが慌しくしている様子が映っていた。

「うわー、すごいことになっちゃったねえ。どうするのかな、神様達。」

りっちゃんも人事のように言ってるけど、私は焦っていたのよ。なぜなら、私はある意味で当事者だったから。

(うそ、バレた・・・？神様条約で国境に張ってる結界、バレたってこと？つまり、あの白猫がやるうとしてることって・・・)

「あーちゃん、あーちゃん？」

「悪いりっちゃん。用事を思い出したから帰るね。それと、明日は

私いないと思う。学校にも行かないから先生に言っておいてくれる？」

「うん、わかった！。頑張ってるね！」

多分、りつちゃんは私が何をしにいくかはわかってない。

だけど、大切なことなんだってことはわかってきてくれるんだろうなあ。

こういう時、幼馴染パワーは偉大だよな。

「ゴメンね、今度パフェ奢ってあげるから。」

「わーい。」

「じゃね。」

「ばいばーい。」

りつちゃんに見送られながら、私は自分の家に戻ったの。

家が隣同士だし、時間はかからなかったわ。

「ただいまー！」

靴を脱いで、2階の自分の部屋に駆け上がる。

「亜津子、どうするんだい？解決、しに行くのかい？」

私は、目の前に立体的に出てきた私の影に向かって叫んだの。

「当たり前！じゃなければ楽しい遊びの時間をキャンセルして帰るもんか！あの白猫には、たっぷりお仕置きを上げてあげないといけないわねえ……。」

「クククって、年頃の女の子がしていい笑いではないでしょうに……。あたしゃあんたの将来が心配だよ。」

「何言ってるの！私とりつちゃんの逢引の時間を邪魔したのよ！？生まれてきたことを後悔するくらい痛めつけてやらないと気がすまないわ。」

「逢引で……。少なくとも向こうは遊んでるだけだと思っただけだね。レズなんてやめて、男と付き合えばいいのにさ。貴重な青春を

無駄にしてるんじゃないのかい？」

「レズなんて呼ばないで、百合と言ってよ！それに、自分の青春をどう使おうと私の勝手だわ！凡人にはりっちゃんの可愛さがわからないのよ！あんなに可愛いのに・・・それに、私りっちゃんに好きな人が出来たら全力で応援するもの。りっちゃんが悲しむようなことはしないし、誰にもさせないわ。」

「それがたとえ、神様にでも、かい？」

「ええ。たとえ、神様でも、よ。」

私と私の影は、少しの間見詰め合ったの。

傍から見たら可笑しな構図だったでしょうね。

でも、ここには私たちしかいないのだから、関係無いわ。

「じゃあ、行くんだね？」

「ええ。今すぐにでも。もしあの白猫が、本当に結界を破る方法を見つけているとすれば、止めなければ、あなたたちの、いえ、私たちの時代は終わるわ。」

「なら、まずは情報集めだね。誰に聞きに行くんだい？」

「大丈夫よ。多分、もうすぐ来るわ。あいつだって、こんなことになってるのに黙って見ているわけにはいかないでしょ。」

「そうなんだよねえ。困ったことに、今回は静観するとうわけには行かないみたいだ。全く、俺は静かに暮らしていたんだけどねえ・・・。」

突如部屋の中に響いた男の声に、しかし私も彼女も驚いたりしなかつたわ。

そろそろ来ると思ってたし。

「乙女の部屋に勝手に入るなんて、殺されても文句は言えないのよ？オトナシ。」

「うわ、こええ。いや、すいません。マジごめんなさい。」

そう言って私たちの前に姿を現したのは、くたびれたグレーのスーツを着た20代後半位のおっさん。

こんなのが部屋にいつの間にかいれば、普通の女の子なら叫んでいるわね。

普通、ならね・・・。

「オトナシ、情報は？当然、あるんでしょ？」

「こつちも一応商売でやってるんだけどねえ。まあ、今回はそんなこと言ってもらえないし、特別にタダで教えるけどさ。恐らく、君たち>久瀬くにしかこの問題は解決出来ないだろうしねえ。」

「余計な前置きはいいから、早く。」

私が睨むと、オトナシはそれまでのふざけた態度を一変させて、プロの顔になったの。

(うん、この顔のときは少しかっこいいんだけどね・・・)

普段がふざけているので、あまり好きじゃないのよ。

オトナシは、今現在も続く、忍者の末裔なの。

多分、この顔も本当の顔ではないんでしょうね。

でも、今までも彼がいたから解決出来た問題もあるし、腕は確かな忍者なのよ・・・多分。

「何か、とてもバカにされているような気がするんだけど・・・。ま、いいか。それよりもあの邪神だけど、どうも、>幼神おとしくみたいだね。」

「>幼神くか・・・やっかいね。力が強いともう最悪だわ・・・。」

神様は、生まれた瞬間から高い力を持って生まれてくるの。

そもそも神様を生み出すには強い信仰の力が必要だから、当た

り前なんだけど、問題なのは、力の制御がうまく出来ないということ。

長い時間を生きた神様は、信仰の力も減ってるし、自らの力の制御の仕方もわかってるから問題ないのだけれど。

私たちの間では、生まれてから20年以内の神様を>幼神わらわ<、それ以外を>神様<って呼んでいるの。

「つまり、あの白猫は、やたらと強い力を持つ上にそれを制御出来ない、ううん、する気がない神なのかしら？」

「そつみただねえ。ていうか、多分生まれたのも1週間くらい前だしね。」

「1週間!?それってほぼMAXパワーってこと!？」

「うん。都内に『白い牙』っていう秘密結社があつてね。そこは邪教と言つてもいいくらい禍々しいことばかりやってる所なんだけど、そこで生まれたみたい。」

「おまけに、冗談じゃなく邪神なのね……。そこから生まれた神なら、結界を破るなんて考え付いてもおかしくはないか。」

神様は自分の生まれた理由に関わる力を持つて生まれてくるの。

海外の神様には万能の力を持つてるのもいるみたいだけど、日本で生まれる神様は皆、何かに特化した能力や性格を持つているのよ。大雑把に言えば、川の神様なら水を出したり、水の流れを変えたり出来るわけ。

力の大小はあるし、同じ属性の神様でも、全く同じことが出来るとは限らないけどね。

「多分、人の悪意や憎悪なんかの負の概念の神様なんじゃないかな。」

結界を破るってことは、そういうことだし、ね……。」  
（そう、結界を破る方法は確かに存在する。でも、それをやったら人間と神の共存の時代はお仕舞いよ。もしかしたら、その結果出る悪意を吸収することが目的……？）

神様は、自分の力に合ったものをとることでも力を蓄えることができるの。

さっきの例だと、水の神様なら水がたくさんあるところにいれば力が増すわ。

つまり、悪意や憎悪から生み出された邪神なら、たくさんの方が怒ることでも力が増す可能性があるわけ。

「これは……想像以上に拙ますいいかも知れないわねえ。」  
私が溜息をつくとき、オトナシが笑い出したの。

「くく。どんな問題だろうと、君たちにかかれば一発だろう？君たちに勝てる神なんて、この世のどこにもいないさ。」

「楽しそうね。私は楽しくないわ。戦いなんて野蛮だし、少しの間でもりつちゃんと一緒にいらなくなるもの……。」

「明らかにそっちが本題そうじゃのう。」  
今まで黙っていた私の影が呆れた声で言うから、

「当たり前でしょ。今回だって、りつちゃんが困るから解決するんだからね！」

「って返してやったら、オトナシまで呆れた顔して……。」  
「何よ、私何か変な事言った？」

「絶対変な事言っていないと思うんだけどな……。」  
「……それで、これからどうするんだい？」

「その『白い牙』とやらに行くわ。とりあえずこんな事態になった責任を取ってもらうの。場所を教えて？」

「……うわ、可愛そうに。『久瀬の悪魔』に目をつけられるなん

て。」

「何か言った？」

私はニツコリ笑ってオトナシを黙らせると、教えてもらった場所に直行したの。

勿論、もちろん平和的に解決するためよ？

その夜、都内の高級マンションに赤い花が咲いた。

## 第2話 神様と人間の関係

「ねえ、聞きたいことがあるんだけど。それに答えてくれれば、これ以上痛い思いはしなくてすむんだけどな。」

「あ、悪魔・・・その力、お前が『久瀬の悪魔』か・・・？」

「質問に答えてないわね。それに、乙女に向かって悪魔だなんて、これはもう少しお仕置が必要かしら？」

「ひいひいひいひい。」

都内の高級マンションにあつた『白い牙』のアジトに乗り込んだ私は、とりあえず3人ほどを動けなくした上で、教祖っぽい人にお話を聞いているのだけど・・・。

「私にも時間がないのよ。あんたたちが生み出したあの邪神、いったいどんな力を持った邪神なのかがわからないと、無用な被害を出してしまうかもしれないの。出来るだけ穩便に済ませたいんだけど、教えてもらえないなら、私にも考えがあるわよ・・・？」

「うううううううう。」

「おいおい。こんなに怯えておるぞい。これじゃ話したくても話せんじゃろう。少し落ち着いたらどうじゃ。」

立体的に出てきた私の影がそう言ったとき、

「か、影が喋った・・・！も、もういやだ！何でも話す、知ってることなら何でも喋るから、お願いだから殺さないでくれ！お願いだ！」

つて教祖らしき男は泣き出しちゃったの。

「・・・あなたが一番怖がらせているようだけど・・・?」

「無礼なやつじゃ。」

「ごめんなさいごめんなさいごめんなさい・・・。」

「鬱陶しいわねえ、まあいいか。」

あんまりウザイから蹴り飛ばしたくなっただけど、そこをグツと我慢して私は尋ねたの。

「あの邪神の能力は？お前たちは、あの邪神を使って何をしようとしてたの？」

神様っていうのは、たくさんの人間の願いや祈りを糧かてとして生まれてくるの。

でも、前にも説明した通り、日本の神様は何かの特化した能力しか持てない。

つまり、曖昧あいまいな願いじゃ生まれることは出来ないってこと。

あの邪神がこいつらの願いから生まれたのなら、こいつらは何かをしたくて神様を作り出したってことなの。

「答えなさい。あなたたち『白い牙』は、何をするつもりで神なんか生み出したのよ?」

「・・・この社会は狂っている。」

「・・・何ですって?」

「だってそうだろう！何故人間が生み出した神様ははが人間よりも上に見られる!?俺たちはな、あいつらが信仰を取り戻したいっていう、ただそれだけのために職を奪われた人間の集まりなんだよ!」

・・・神様は、人間から信仰してもらわないと力が弱まって、やがて消しんでえてしまうの。

そうならないために、神様達は色々なことをやっているわ。

その内の1つが、人間の仕事を手伝うこと。

神様は、自分の能力に合った事なら、人間に出来ない奇跡を簡単にやってのける。

しかも、神様に必要なのは信仰心だけ、お金を払う必要も無いからって、人間の職員を解雇するっていうお話は何度も聞いたことがあるわ。

「あいつらは邪魔なんだよ！俺たちの社会に勝手に入ってきて、俺たちの生活を乱しやがる！俺たちはこの社会全体を変えたかったんだ！日本から神様がいなくなれば、万事解決だろうがよ！」

「なるほど。それで>神の立場を貶める<という能力を持った邪神が生まれたわけね。」

男が、ビククリして私の顔を見てきた。

何故知っている？とでも言いたそうね。

こんなの、一寸考えればわかるでしょうに。

「あなた、知っているかしら？神様条約を破る方法。」

「し、知るか。どうせ勝手に出ていくんだろ。そもそも、神様条約なんてデマじゃないのか。神様が勝手に言ってるだけで、誰も確認したことないんだろ。」

私は溜息をついてから、とびつきりの笑顔で言っただけ。

「いいえ、神様条約も、そして、それを破る方法もちゃんとあるのよ。それはね・・・人間の虐殺をして、完全なる邪神になること」

「・・・は？」

「あなたが生んだあの邪神も、完全な邪神というわけではないのよ。邪神になるべく生まれてきただけ。厳密にはまだ神様なの。」

男は、何がなんだかわからないといった顔で聞いていたわ。

「神様にはあの結界は絶対に壊すことは出来ない。どんなに強大な力を持っていても、絶対にね。でも、邪神には効かないの。あなたは、人間と神様の戦争の火蓋を切ったのよ」

「な、何が、何故・・・私は、何のために・・・」

「教えてあげない。一応記憶は消してあげるけど、あなたの心には一生罪悪感が残るようにしてあげる。何が原因かもわからない罪悪感に、ずっと悩まされればいいわ。」

私は踵かかとを返すと、出口に向かって歩きながら言ってやったの。

「それだけのことをしたのよ。あなたたちは。」

パチンと指を鳴らすと、もう部屋には誰もいなくなっていたわ。床に転がしておいた3人も、あの教祖も。

これからあいつらは、原因不明の罪悪感で一生悩まされるでしょう。

「亜津子よ。面倒なことになったのう。」

影が私に話しかけてくる。

「そうね。でも、あの白猫の思う通りにはさせないわ。」

私がドアを開けて廊下に出ると、部屋の中でポツと火が灯ったの。それを確認してから、私はドアを閉じた。

マンションの1室だけが火事によって全焼したというニュース速報が入ったのは、それから2時間後のことよ。

### 第3話 白猫邪神の実力

『白い牙』を壊滅させた私たちは、その足で近くの港に来ていたの。

「本当にあの白猫しんやまここに来るんでしょうね？」

『ああ、間違いないよ。>彼ら<がそっちに向かってるっていう確かな情報もあるしね。』

電話越しに教えられた情報は、私を驚かせるには十分だったわ。

「うそ、>神会しんかい<が来るの！？あいつらが来るなら私がここにいる意味ないじゃない。私帰るわ。そして、りっちゃんと朝まで遊ぶ。」

『いやいや、会いたくないのはわかる。だけど、彼らは数だけで、本当に力があるのはほとんどいないんだから。君がいないと始まらないよ。』

「あいつらだけで何とかするでしょ。」

>神会しんかい<ってというのは日本の政府組織で、主に神様と人間の間のトラブル解決をしているの。

たくさんたくさんの神様がたくさんいる日本ならではの組織よね。

でも、力で何でも解決できると思ってる脳筋のうきん集団で、結構な嫌われ者なのよ。

美人で人気者の私とは対極の存在ってわけ。

だから、現場で会うたびに喧嘩を吹っかけられて困ってるのよ。

「今、真実とは違う心の声が聴こえた気がしたが、気のせいかな？」

「気のせいでしょ？大体、影が私に意見するなんて100万年早いのよ。」

「ひどい言われようじゃの・・・」

『自分の影と漫才してる痛い人に見られるよ？』

「あ？」

『・・・ごめん』

「まあいいわ。それじゃ私帰るから。」

『いや、待って待って！今>神会<のやつらが人間の集団と交戦状態に入ったって情報が！』

「は？何してんのよあの脳筋集団は？」

『いや、どうやらMCまじんだいごころされているようだ。すごいなあしるわいの邪神。こんなことまで出来るなんて。』

「MC・・・あなるほど。そういうことか。」

『何かわかったのかい？』

「つまり、あの邪神しよわいの『神の立場を貶める』って能力は、大抵のことが出来るってことじゃない？」

『・・・それはどういうことだい？』

「あなたも今思わなかった？『神様は洗脳なんていうことも出来るんだ。なら今までの俺たちの行動って、神様に操られていた結果なんじゃないか』って。」

『！！！！』

「そんなことあるはずがないってわかってても、頭のどこかで考えてしまう。それでなくても人間は、自分たちと違う存在を認められない種族だからね。少なからず神様を信用出来なくなる人間も出てくるハズよ。これは、>神の立場を貶める<行為だわ。」

『つまり、神の信用を落とすためなら、どんなことでも出来る能力を持つ邪神だと？』

「自分の力の及ぶ範囲でね。まあ、これは私の推測に過ぎないけれど、大きく外れてもいないんじゃないかしら？」

そう言いながら背後をゆっくりと振り返ると、そこには1人の黒いコートを着た男が立っていたのよ。

「MCされた人間・・・いえ、この気配は神様かしら？」

『な、襲われているのかい！？大丈夫！？』

「今から忙しくなるから、後でかけ直すわね。」

電話の電源を切って、私は目の前の神様に向き合った。

「待っててくれるなんて紳士なのね、ありがとう。でも、紳士ならこんな夜更けに乙女を襲うなんてしないと思うのだけど？」

「・・・げ・・・」

「？何？」

「・・・げ・・・」

「ああ、お約束の台詞か。」

「逃げるー！！！」

コートコートの男は叫びながら真っ直ぐに私に突っ込んできたの。

「残念だけど、私・・・」

私は、暗闇の中でもはっきり見える『私の影』の中に右手を突っ込みながら、

「とっても強いなの？」

影の中にある存在を掴み取った。

ドカンと音がしたその瞬間、コートコートの男は20m位後方に吹き飛んで行ったの。

「出来るだけ痛くないようにしてあげるけど、保障はしないわ。」

ズルリと『自分の影』から出した私の手には、長さ1mほどの漆黒の日本刀が握られている。

「神刀しんとう闇切やみぎり。使うのは久しぶりなの。うっかり命まで取ってしまうかも知れないけれど、その時はごめんなさいね。」

コートコートの男は体制を建て直している。

（何が起きたのかわかっていないようね。でも、本能的に私のことを警戒している。）

直ぐに仕掛けてこないのは私にとっては好都合よ。  
その間に、いろいろ罫を張ることが出来る。

(大丈夫。さつきはあんなこと言ったけど、絶対に助けて見せるか

。)

あんな邪神いばむしの手のひらで踊るなんて、真つ平御免だもの。  
そんなの、私のプライドが許さない。

「相手は恐らく何らかの芸能の神様じゃのう。少なくとも戦闘を得  
意とする神ではないわい。」

右手の闇切が小声で話しかけてくる。

「集中してるからちよつと黙ってて、ヤミ。」

「このワシが折角教えてやってるといふのに・・・」

この闇切ことヤミこそが、ずっと私と話をしていた『私の影』。

正確には、『私の影の中に入っていた神様』なの。

「向こうもやつとやる気になったみたいだしね。りっちゃんに捧げ  
るこのお肌に傷を付けるわけにはいかないのよ。わかる？」

「わからん。だが、お前に怪我をさせたくはない。一気に片を付け  
るぞい。」

「当然。一撃で決めるわ。」

コートコートの男が走ってくるけど、たった20mの距離を詰めるのに  
3秒以上かかるようじゃ

「私には勝てないわよー!」

叫びながら、私はほとんど地面に這はいく蹲まるのような体制で残り15  
6mほどの距離を1秒で詰めると、

「!!!!!!」

相手の驚いた顔を真上に見ながら右手の闇切を一閃した。

「……ありがとうございます。」

そういいながら私の後ろで倒れる神様。

「最後までテンプレな台詞ありがと。ま、手加減したから安心してしばらくは動けないでしょうけど、その内動けるようになるから。」

「お主もテンプレ台詞じゃがの。」

「うっさいヤミ。あんたは戻ってなさい。」

闇切を影の中に戻ると、私はオトナシに電話をかけたの。

『大丈夫だったかい？』

「あら、心配してくれるなんて、珍しいこともあるのね。」

『いや、相手の事に決まってるだろう。ここで操られているだけの神様を殺したりしたら、それこそ戦争の火蓋を切ることになる。そうならお仕舞いだろう？』

「……そうですか。ま、いいけどね。」

『え、拗ねてるのかい？』

「あ？」

『すみませんでした。』

私は溜息を1つ吐くと、気持ちを切り替えたの。

「……それにしても、不完全とはいえ神様さえ操るとはね。あの邪神、<sup>しんじん</sup>そうとうなもんだわ。これは、>神会しんかいくに任せっきりに出来ないわねえ……。」

『やってくれるかい？』

「ここまでやって帰るなんて出来ないしねえ。ところで、聞きたいことがあるのだけど？」

『え、何だい？』

「これって待ち伏せよね？こっちの動きがバレててガセネタ掴まされてる、何てことはないわよね？」

私は電話越しでも伝わるであろうとびっきりの笑顔で聞いたわ。

『……』

「ゆ……る……さ……ない」

私は怒っているのよ。

この後家に帰って、オトナシが泣いて許しを請うまで殴ってやったわ。

## 第4話 異変

「結局、邪神の居場所はわからない内に朝になっちゃったわね。」  
「いや、本当に悪い。しかし、この俺がガセネタを掴まされるなんてな……」

それについては私も驚いているの。  
今までオトナシの持ってくる情報は100%真実のみだったから、軽い口調で言ってるけど、オトナシも内心煮えくり返っているはずよ。

それがわかっているから、私も泣くまで殴るだけで許してあげたのよ。

「か、かなり理不尽な事言われているような気がするんだけど……」

「気のせいよ。」  
「あ、そうですか……。しかし、実際どうする？俺のほうでもいろいろ試してみたが、お手上げだよ。使える人材がほとんど操られている。どうやら、神の干渉に抵抗力が弱い人間がほとんどMCされているようだね。」

全ての人間には神様の力に対する抵抗力が存在するわ。

まあ、例えば悪いけど人間が体内の病原菌にワクチンを作るのに似ているかしら？

それは個人差があるのだけど、一般的には神様の近くに長い間いると抵抗力が高い人間になれるわね。

「距離は？どのくらいの範囲の人間に影響が出ているの？」

「……ほぼ日本全土……」

「うお！？それはマジかの！？」

ヤミと同じくらい、私も驚いているわ。

八百万の神様が存在するこの日本では、彼らは常に自分の住んでいる地域を見守っているんだもの。

異変があれば、その原因を取り除くはずだし、それとは別に、神会くのようにトラブルを解決して回る人間のグループや組織も数え切れないほど存在するの。

日本全土が異変に巻き込まれていて未だに解決されないのは、彼らが気付かないほどに巧妙なのか、それとも彼らの力でもどうしようも出来ないか……。

後者ってというのはあまり考えたくはないけどね。

「私たちが何とかするって言っても、邪神の居場所すらわからないからどうすることも出来ないし……」

どうしよう……と3人で唸っている時、家のチャイムが押されたの。

「りっちゃんには昨日、学校には行かないっていつてあるし、誰かしら……?」

すぐに1階に下りて、ドアを開けてみる。

「亜津子さん、お久しぶりです！今日もお美しいですね！」

「帰って。」

ボタンとドアを閉め、チェーンロックも付けて私は部屋に戻ろうとしたんだけど……

「いや、何で閉めるんですか！？お願い開けて！。首相からの依頼書を持ってきたんですよー！政府からの直々のお仕事ですよー！」

あまりに五月蠅いからドアを開けると、そこには黒いスーツを着た20代位の男が。

「近所迷惑なんですけど。それに、『政府から』なんて大声で言わないでくれる？そういうの秘密にしてるの知ってるでしょ？」

玄関に引っ張りこんで説教タイムに入るんだけど、こいつ話を聞いてないわね……。

「憧れの亜津子さんの家に入ってしまった。いい匂いがします。」

何て言って変態的な行動を始めるもんだから、

「殺すわ。」

私は何の躊躇いもなく『私の影』から取り出した闇切を振るつたの。

「あぶな！あ、危ないじゃないですか亜津子さん！何を怒っているんですか？」

今回は昨日の神様の時のように手加減なんてしないで、完全に殺すつもりで振ったんだけどな。

やっぱりこいつ、侮れないわね。

「いいえ、何でもないわ。それで、何で>神会<ナンバー2のあなたが直接私の所に来るのよ？」

こいつは雨竜海斗つりゅうかいとという人間よ。

ヘラヘラしてくせに>神会<のナンバー2を勤めていたり、私の攻撃をアツサリ避けたり、中々に油断出来ない人間ね。

3年前、初めて>神会<と仕事が被ったとき以来、こうして度々私の所に来ては愛の告白をしてくるのよ。

まあ、ただ私の美しさに心を奪われたっていうのならもう少し優しくしてやってもいいんだけど、どこか信用出来ない胡散臭さがあるのよね。

「あなたに仕事の依頼をすることになって、自分から説明役に立候補したんですよ！当たり前じゃないですか！」

「ああ、それで。まあ、他の連中よりマシか……」

「ああ、ずつとあなたとこうして話していたのですが、残念ながら時間がありません。早速、お仕事の内容に移らせていただきます。よろしいですか？」

「え、ええ。いいわ。」

いきなりテンション変わるから驚いたわ。

仕事の顔になると、キリっとした顔つきになるのよね。

ちよつとかっこいい、かも……？

「政府では今回の邪神事件に対して、第1種警戒態勢を取ることになりました。」

その発言は、流石の私でも驚くなんてことじゃすまなかつたわ。

「え、嘘でしょ！？この状態でそんなことしたら、一体どんなことになるのかわからないハズないでしょ！？最悪の場合、本当に神様と人間の戦争が始まるわよ！？それもわからないほど今の政府は無能なわけ！？」

第1種警戒態勢とは、つまり敵対勢力に兵器の使用を全面的に許可するってこと。

操られている人間や神様に、武器を向けるってことなの。

そんなことをしたら、この事件が終わったとき残るのはお互いに対する憎悪だけよ。

人間は『神様に操られたから攻撃された』、神様は『操られていただけなのに攻撃された』ってお互いを憎み合って、そしてそれは言葉の応酬だけでは済まされなくなる。

神様の力は強大だけど、人間も負けてはいない。

最後に残るのは荒廃した大地と死体、なんて漫画みたいな事が現実になるかもしれないわ。

「それがわかっててそんなことを許可したの！？だったらそいつら今すぐ死ぬべきよ！いいえ、私が殺すわ！」

「落ち着いてください。僕らも今回の決定は変だと思ってるんですけど、もしかすると、政府は既に邪神に操られているのかもしれない。」

「あつ……そうか、その可能性を考えて無かった……。」

「やっぱり、あの邪神の能力については既にわかっているんですね？人を操る能力……。」

「いえ、あの邪神の能力は、>神の立場を貶める<事よ。その結果に繋がることなら何でも出来る。」

「……なるほど、その考えはありませんでした。その情報はどこから？」

「生みの親たち。」

「なら間違いないですか。しかし、そうなるともっとややこしい事になってきますね。神と人間の戦争なんて、それこそ神の立場を決定的に落とすことに繋がる。あの邪神の最終的な目的は戦争だと見

て間違いないでしょうね。」

「何てやつかいな邪神なの、あの白猫。見つけたら問答無用で殺すわ。」

「とにかく、これで政府が操られているのは確定的だと言っていいでしょう。ところで依頼の話ですが、さっきは政府からの依頼と言いましたが、実は違うんですよ。」

「そうなの？」

「ええ、これは僕個人からの依頼です。」

「いいわ、言ってみて。」

「僕も、事件解決に協力させてください。」

「・・・はい？」

「もちろんお金は払います。戦闘能力には自身がありますし、雑用でも何でもやらせていただきます。僕を、亜津子さんのグループに入れて欲しいんです。」

「え、何で>神会<じゃなくて私の所なのよ？お金を払って雑用やつてまで、私たちの所に来たい理由は何？」

「おそらく>神会<ではあの邪神にたどり着くことすらも出来ないでしょう。邪神の居場所は既にわかっておりますが、純粋に戦闘能力の差です。彼らでは無理だ。」

「私たちなら倒せると？」

「ええ。私の知る中で最強であるあなたなら。逆に、亜津子さんたちが無理ならばこの世の誰にも不可能だと確信していますので。」

「やっぱりこいつは侮れないわね。」

「何らかの情報を知っているのか、それとも特殊な能力を持っているか。」

「こいつにだけは気を許さないようにしないと。」

「わかったわ。あなたも来なさい。ただし、私がリーダーだから、その辺わきまえてよね。」

「わかっていますよ。僕があなたに逆らうわけが無いじゃないですか。」

「ならいいのよ。」

「時間がありません。今は指揮系統が混乱していて第1種警戒態勢のことは一部の人間しか知りませんが、一般市民に知れば大変な騒ぎになります。猶予はあと24時間といったところでしょうか。」

「は？何でそんなに時間があるのよ？」

緊急時に使う命令なんだから、直ぐに国中に伝わらないと無意味でしょうに。」

「フッフ。ちょっとした細工をしてきましたので。」

「あっそ。何をしたのは聞かないでおくわ・・・。」

「聞いてくれてもいいのに・・・。」

私はその言葉を見捨ててオトナシが待つ2階へ上がって行った。

「待つてくださいよー!!」

ともあれこれで情報ゲットね。

待っていなさい邪神じよしん、私がキツイおしおきしてあげる。

「フッフッフ・・・。」

## PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になるうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能<sup>たんのう</sup>してください。

---

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。  
<http://ncode.syosetu.com/n9017w/>

---

神様バトル 勝利しないと世界が滅ぶ! ?

2011年10月25日03時20分発行